

インターネットラジオ局がつくる“読む”ラジオ

AWAPURADIO

アワプラジオ通信

2016.09

アワプラジオ通信は千代田区社会福祉協議会（東京・九段下）の中にあるちよだボランティアセンターに置かせていただいています。また、アワプラジオやあべこうがかわるイベント等でも配布しています。バックナンバーがウェブサイト上でダウンロードできます。置き場を提供してくださる方も随時募集しています。発送を希望される方もお気軽にご連絡ください（連絡先は裏面）。

<アワプラジオとは> 認定 NPO 法人 OurPlanet-TV で出会った仲間、2009 年に開局したミニFM、インターネットラジオ局です。名称は OurPlanet-TV の略称であるアワプラにちなんでいます（アワプラとは別々の団体です）。

『Abe's VIEW』 Vol. 21 「会社の営業職と非営利組織の寄付金集め」

あなたは「会社の営業職」と聞くとどんな中身を想像するでしょうか。とにかく嫌がられても飛び込み訪問やテレアポを数多くこなす。メンタルと押しの強い、口のうまい人が向いている仕事。頭を下げてお願いする……。だいたいそんなものだと思います。日本が右肩上がりでもどんどん豊かになっていった時代、これで相手との信頼関係も築けて自分自身の内面も生活も向上させることができたからという成功体験がある世代にとっては、特にそう感じられるのではないのでしょうか。このように能動的に相手との接触を試みる営業スタイルをプッシュ型営業といいます。

しかし時代は変わり、このような営業スタイルは方法としてあまりそぐわなくなっています。相手のニーズのないときの訪問やアポは熱意にほだされるよりも嫌悪の対象となって、むしろ自分の組織や商品のイメージダウンにつながります。情報過多の現代社会、知りたくもない情報に触れさせられた結果、心が動かされるほど牧歌的ではありません。今やアポなしではセキュリティ上、ビルや集合住宅に立ち入ることすらできません。

一方でウェブやセミナー、イベントの開催等を通じて、相手に自ら歩み寄ってもらうのがプル型営業です。とにかく狩りに出て、目の前に現れた獲物を仕留めるのがプッシュ型なら、プル型はそれとは真逆です。でも、それは待ちの営業とは異なります。プル型営業には適切なウェブでの情報発信や企画・コーディネートなどが必須で、盤石な“罠”を仕掛けるために待ちの営業どころかどんどん攻めなければなりません。ネットのない時代でも優れた営業担当者は知っていて実践していたのですが、要は危険を冒して獲物と対峙しなくても、罠にかかった獲物の肉をいただければいいわけです。

これらは会社の営業だけではなく、非営利組織の寄付金集めにもいえます。「私たち良いことやっていますから」と、とにかく頭を下げて「あなたの善意をお恵みください」という姿勢ではなく、思いや志のある方に社会貢献の方法やチャンスという商品を、寄付やボランティアというかたちで提供させていただいているのだと自覚しなければなりません。もっとも日本の多くの非営利組織では、プッシュ型の寄付金集めすら満足にできていなかったという問題はあるのですが。（阿部浩一）

ヨムヨム旅行記 ペトラ遺跡（ヨルダン）



The End of The World（世界の果て）と書かれた板が岩の横に置かれている。確かにそういう表現が似合う雰囲気だった。岩の塊が広がるその広場は、岩山の壁を彫って作られた建築物から成るペトラ遺跡群のひとつ、「エド・ディル」という神殿が強大な存在感を放っている場所だった。

巨大な岩盤の深い亀裂<シーク>が作る隙間の道を歩き、足場の悪い細く急な坂を登り抜けると、突如開いた視界にクリーム色のエド・ディルが現れる。想像していたよりもかなり大きい。だが硬い岩盤を掘り起こして作ったとは思えないほど細部まで繊細で滑らかなデザインだ。高さ 45m、幅 50m。2000 年以上も前に山の上部から人の乗ったゴンドラを吊るし人力だけで彫られたと説明を受けても、すぐには信じられなかった。

手頃な岩の上に登り地平線を望む。眼下の大地には同じように彫り起こされた岩壁がいくつも放置されている。崩れ落ちた石の残骸が示すのは遙か昔ここに社会の営みが存在した事実だ。

夜はペトラバイナイトというツアーに参加した。真っ暗なシークを「エル・カズネ」の広場まで歩き、昼はピンク色に染まるエル・カズネをキャンドルの灯りだけで眺めるといふものだ。無数に焚いたキャンドルが漆黒の闇から 2000 年の歴史を浮かび上がらせる。

悠久の思いに浸りながら空を見上げると、見たこともない光景が広がっていた。空が隙間なく星で埋まっている。流れ星は縦横無尽に空を駆け、そこらじゅうで星が瞬きをしている。あの星が生まれたとき、このエル・カズネはまだ存在していなかった。そしてここに人の社会が作られ栄え衰えていくあいだ、あの星は地球に向けて輝きを送り続けていたのだ。

ふとそんな風に考えたら二十一世紀の現在、こうして両方を眺めていることが奇跡に思えた。世界の果て、私にとってそれは果てしない時空が交わる場所だった。（浅香友里）

「忙しい」を捨てる 時間にとらわれない生き方

(2016年1月) アルボムツレ・スマナサーラ 著 角川新書・907円



スリランカ上座仏教長老である著者は、1980年来日、「怒らないこと」(サンガ新書)等の初期仏教と瞑想についての本を多数著作している。伝統的な方法を使って心の安定をはかるといって、因習的な思想まで教えに組み込まれているものが散見される。しかし本書は、日本にみられる現状維持主義、伝統を偏重する傾向を批判している。

すべての物は変化し、もとの状態に戻ることはないのだから、変化に応じて常に挑戦することが大切だという。メンタルケアの分野の本で、文明が発達する前のあり方に回帰するべきだという論調を見るたびに息苦しさを感じていた。新しいものを創造することこそ文化であり、個人としても変化し続けることが大切であるという本書の言葉に、向上心を持って生きてもいいのだと安心した。

話題は死生観、時間感覚、一日の時間の使い方などさまざまに及ぶ。時間について基本的なところから考えるので抽象的な話を経過するが、結局「時間がない」の正体は、自分が今何をすればいいのかわかっていないことから来ているので、過去や未来を妄想せず今この瞬間にやらなければならないことを理性的に選択した上で行う、というシンプルな解答に達する。(大森周子)

ローカルメディアのつくりかた 人と地域をつなぐ編集・デザイン・流通

(2016年5月) 影山裕樹 著 学芸出版社・2160円



「誰に対して発信するのか曖昧だ」。

「ローカルメディアを作りたい」と打ち明けた時に、一緒に地元で市民活動をする仲間に使われた言葉だ。著者である影山氏のトークイベントに参加した翌日の興奮冷めきらぬ私をみかねて論してくれたのだろう。しかしローカルメディアを作ろうとする人に勇気を与えてくれる本書を読み返してみると、ますますワクワクしてくるのである。

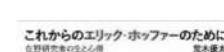
そもそもローカルメディアとは地域で発行されるフリーペーパーや雑誌などの情報を伝える媒体のことだ。他のメディアと違い、地域の人と人をつなげる媒体としての機能を期待される。だから、完成品そのものよりもつくるプロセスがいかに豊かであったかがその価値を決めるのだ。そして地域でつながるためには、その地域で手に取ってもらわなければ意味がない。

ではローカルメディアを作るにしても、いったい誰に対して情報発信するのか? 本書によれば、「地域の人とよそ者のような異なる立場の人々が異なる思いや地域への認識を抱えたまま集まることが重要だ。このすれ違う思いが対話を繰り返すことで一つにまとまる瞬間がある」と書かれている。

私の地元に戻ると、この対話をする場はすでに生まれている。月1回開催の交流会及び月2回の読書会には、地元に住んでいる商店街の方や今年就職を機に引っ越してきた若手社会人など多様なメンバーが30人ほど参加している。このコミュニティでの対話をさらに深めていくことで誰に届けたいのかを明確にしたい。そしてみんながつながるメディアを作りたい…。(平川凌兵)

これからのエリック・ホフファーのために 在野研究者の生と心得

(2016年3月) 荒木優太 著 東京書籍・1620円



勉強なんてその気になればいくつになっても好きにやればいいものなのだと、筆者は四十路にして昨年からいくつかの資格取得に挑戦するための勉強をしながらつくづく思う。これまで志望校進学のための受験勉強や、どこかに属して行う学問や研究などと呼ばれるものとはおよそ無縁に生きてきた。

そんな筆者が10年近く前、どこかで知って興味を持ち手にしたのがエリック・ホフファーの『大衆運動』だった。ホフファーは「沖仲仕の哲学者」と呼ばれ、今でいう港湾労働の仕事に従事しながら、大学や研究機関などに属さず独学で学問を追究した哲学者だ。大学教授や学者などではない、いわゆるブルーカラーの哲学者の存在に衝撃を受け、強いシンパシーを感じた。そのホフファーの名をタイトルに取り入れた本書は著者いわく「日本にもホフファーのように狭義の学術機関に頼らずに学的な営みをつづけてきた研究者たちの歴史がある」ことを紹介した内容となっている。

著者はそんな研究者たちを在野研究者と名付けて、その生きざまをひも解くことで今を生きる同じ立場の者たちに羅針盤を提供する狙いとしているが、著者自身が有島武郎を専門とする在野研究者でもあるだけに、取り上げた先人たちへの愛情が感じられる。精神分析学者の大槻憲二(大槻ケンヂではない)を取り上げた「自前のメディアを立ち上げる」などは、発表する場がなければ自分で作ってしまえという、本紙を発行している筆者の思いとも重なった。ひるむことなく好きなことに打ち込んでいれば、必要なものは後からついてくる。そんなメッセージも伝わってくるような一冊だ。(阿部浩一)